

何を、どう祈ろうか

(ルカ一・一〜二三)

全国聖会での「バッチ売りのおじさん」から一転、大阪では三千人規模の集会、日本宣教フェスタの中で「聖霊の神学」についてのセミナー講師となるといふ、まことに振幅の激しい一週間を過ごしたのだが、共通するのはこの二つとも実によく祈る集会だったということ。そもそも全国聖会は祈られていた。集計すると四十日の「祈り旅」を完結した人は百名の舞台に乗っていた。それほど祈られていたのだから、聖会後の自由祈祷も祝福されるのはある意味当然だ。ベテルからの参加者の中にも「一時間の祈り、あつという間のことでした」という方もいたと聞く。宣教フェスタもそう。皆が日本の同胞、いや世界の救いのために祈り、学び、ささげた集会だった。

一、あきらめずに

この個所はまずイエス自身が祈りの生活を送っていたことから始まる。その姿を見て、弟子たちはイエスに祈りについて教えてほしいと願う。祈りというのは具体的な体験だから、単に聖書を読み、そこから何かを引っ張り出してくれば「祈り」を教えたということにはならない。祈りを教えられるのは、やはり祈った人のみであり、時を聖別して祈りの生活をしてきたイエスはこのことについて適格であった。

さて、そのイエスが祈りの態度について教えたのが有名な「真夜中にパンを借りに来る友人」のたとえ話である。このコミカルなたとえの意図は明白だ。それは八節をみるとおりである。パンを求める友人の願いを聞き入れ、それをかなえた友人はどうしてそれをしたのだろうか。彼らが竹馬の友か、刎頸の交わりで結ばれていたからか。そうではない。理由は至極簡単だ。訪問者がいやになるほど戸を叩いたからである。ようは厚かましかった(新改訳・欄外注)のだ。イエスはさらに言う。欠けだらけの人間の親子関係でも、父は子によくしようとと思うのだから、まして神は良くしてくださいではないはずはない。だからあきらめずに祈り続けよと主イエスは教えられたのだ。

二、聖霊を求めて

なるほど「どのように」祈るかは大切である。しかしそれだけでは十分ではない。何を祈るかも同じく重要である。それについてイエスは弟子たちにいわゆる「主の祈り」を教え、その内容を明確にされているのだが。しかし一三節においては真に求めるべきものはほかならぬ聖霊であることが示されている。我々は聖霊を求めて祈らねばならないのである。

こういふとある人々はいつかもしいない。「それはあくまで主の弟子たちの話であつて、彼らがこの言葉のとおり祈ったこともあり、父の約束の通りに聖霊はもう下つたのだから、今更私たちがそれを求めるといふのはアナクロナではないか」と。確かに今日、聖霊はすでにこの世に來られ私たちを救い導き、教会を、個人を力づけておられる。しかしそれで満足してはならない。なぜなら聖書には明瞭に「御霊に満たされなさい(エペソ六・一八)」という命令文が記されているからである。ちなみにここは原文では現在形が用いられており、「満たされ続けなさい」という含意がある。そう考えると聖霊を求める祈りというのは信徒の中で常になされるべき祈りであり、その祈りに答えられる主の恵みの業である聖霊充滿を体験するなら、あらゆる祝福はそこから流れ出るようになるのである。

* * *

今ではニューヨーク観光の穴場スポットとして、ブロードウェイの劇場を居抜きで買った礼拝堂で「本場のゴスペル」を体験できる教会として知られる、かのタイムス・スクエア・チャーチだが、その始まりは聖霊に満たされた田舎出の青年牧師と不良少年たちの関わりであった。街に溢れるセックス・ドラッグ・ロクンロールの中で暗闇に埋もれていく少年少女たちに手を差し伸べようとデイビッド・ウィルカーソン牧師は手を伸ばした。もちろんことはそう簡単ではない。実際ウィルカーソン師は何度も命の危険に会つた。しかし彼は不良たちのかかわりを辞めず、そこから人生をやり直すものがポツリポツリと出てきた。そして薬物やアルコール依存に悩む彼らにウィルカーソン師が教えたのはとにかく聖霊の満たしを求めて祈ることを求めた。彼らの多くは更生し、素晴らしい人生を送るようになり、そのスピリットは今や世界一〇カ国に広がっている。これがティーンチャレンジの働きである。さあ友よ執拗に神に求めようではないか。そして真に求めるべき方である聖霊をまず求めようではないか。